

ワイルドとドイルのクィアな“スピリチュアリティ” ——「真面目」は肝心か、肝心でないか

小川 公代

19世紀末に起こった「オスカー・ワイルド事件」は、イギリスの同性愛をめぐる最も有名な裁判のひとつである。恋人アルフレッド・ダグラス(1870-1945)が手紙で言及した「その名を口にできない愛」という一節について裁判官から説明を求められたオスカー・ワイルドが、歴史に残る大演説をした。以下の引用文でワイルドが用いる「スピリチュアル」という言葉に注目したい。

「その名を口にできない愛」とは、(サウル王の息子)ヨナタンとダビデとの間に見られる友情であり、今世紀においては年上の男性が若い男性に注ぐ偉大なる愛です。プラトンの哲学の基盤となり、ミケランジェロやシェイクスピアのソネットのうちにも見いだされるものです。深淵でスピリチュアルにつながりあう愛にして、純粹かつ完全。シェイクスピアにしるミケランジェロにしる、偉大な芸術作品の決め手となったのはこの愛であり、作品の隅々にまでそれは浸透しています。しかし、今世紀ではそれはまったく理解されていません。だから、「その名を口にできない愛 (Love that dare not speak its name)」としたためられているのです。私がここに連れてこられたのも、この無理解のせいでもあります。しかしこれは、美しく、健全で、貴い種類の愛なのです。自然に背くことなど、なにひとつありません。¹

1885年に成立した刑法改正法第11条のラブシェール修正条項 (Labouchere

Amendment) によって、男同士の「著しい猥褻行為」は有罪であると規定された²。たとえその関係性が「スピリチュアル」であったとしても、同性愛を示唆することで「猥褻行為」の疑惑を強めてしまう。リスクを負ってまで、なぜワイルドは法廷で真面目に愛について語ったのだろうか。

戯曲『真面目が肝心』で「真面目」な態度を軽快に笑い飛ばすワイルドであれば、なおさらこの事実は腑に落ちない。その上、彼はスピリチュアリズムを戯画化するような短編「アーサー・サヴィル卿の犯罪」や「カンタヴィルの幽霊」も書いている。前者には、ボジャースという神秘性のかけらもない手相師(太っちょ、禿げ頭に、金縁のメガネをかけた)が登場し、後者は、新しい住人のアメリカ人家族を怖がらせようとしてあらゆる手を講じるがまったく怖がられず、気落ちする幽霊が主人公である。

奇しくも、この二作品はコナン・ドイルによるホームズ・シリーズ第一作『緋色の研究』が出版された年に発表されているだけでなく、「アーサー・サヴィル卿の犯罪」にいたっては、探偵小説のパロディとして描かれている。アーサー卿が一日も早く美しい婚約者シビルと結婚しようと、手相師ボジャースの手相の予言に忠実であらんとその殺人を遂行するため標的を探すプロセスはまさに、ドイルの小説を彷彿とさせる。裁判でスピリチュアルな(同性)愛について語るワイルドと、スピリチュアルな現象を笑い飛ばすワイルドは食い違っていて、困惑するのである³。

ワイルドとドイルは性規範に厳格なヴィクトリア朝社会に生きていた。とはいえ、その規範から逸脱するような「クィア」(queer)な芸術家らは数多く存在し、その法的取り締まりに怯えながらも、既存のジェンダー観を乗り越えようと自由な芸術表現を模索してもいた。ドイルのセクシュアリティに関する研究はほとんどないが、じつは、ドイルがホモソーシャルな関係を小説世界に描くことこそが、社会に蔓延する「ホモフォビア」への牽制となっていたと捉える批評もあるのだ⁴。ホームズとワトソンのような社会的に許容される (socially acceptable) 男同士の友情は、男性のホモソーシャルな関係への不安を払拭することに幾分寄与したと考えることもできる。

本稿では、ヴァージニア・ウルフのクィア性を起点としながら、親交のあったワイルドとドイルの小説の比較分析を行うことで、スピリチュアリ

ティの問題に真面目に向き合ってみたい。ホームズ・シリーズだけでなく、後期の怪奇小説『霧の国』でもドイルが拘泥した〈魂〉の言説がいかに同時代のクィアの言説と近しかったかを考察する。また、ワイルドとドイルが、スピリチュアルなタームを援用することによって、身体やセクシュアリティから切り離された魂の次元でどのように自己実現をめざしたかを検証したい。

1. クィアな空間とスピリチュアリティ

ヴァージニア・ウルフは、『自分ひとりの部屋』のなかで〈クィアな空間〉と〈スピリチュアリティ〉を結びつけて考えていた。ワイルドの法廷でのスピーチにも関係する点だが、ウルフを含む当時のクィアな芸術家たち（たとえば、小説家ラドクリフ・ホールや女性二人で一つのペンネームを共有する詩人マイケル・フィールドたち）は常に魂の両性具有性を創作の中心に据えた。

タクシーに乗り込んだ二人の男女を見て、なぜか満足感を得たとき、肉体に二つの性があるように精神にも二つの性があるのではないか、また完全な満足と幸福を得るには精神の二つの性も結合することが求められるのではないのだろうか？ と考えさせられた。そして、私は素人考えだが、魂には男と女という二つの力が備わっているというイメージを思い描いた。男性の頭では男性的なものが、女性の頭には女性的なものが支配している。⁵

ウルフは、両性具有的な魂のメタファーとして「タクシーに乗り込んだ二人の男女」を用いている。「男と女という二つの力が備わっている (there are two sexes in the mind corresponding to the two sexes)」魂は、ウルフにとって芸術的に理想とされる「クィアな空間」を示していた。ウルフはここで、同様に両性具有的な表現を好んだサミュエル・テイラー・コウルリッジの芸術論を引き合いに出して論じている。「自分ひとりの部屋」というのはもちろん女性作家が経済的に自立して獲得すべき物理的な部屋、あるいは職場を意味していたが、形而上的な次元においては、創造的な活動の場で

もある「クィアな空間」と同義であった。男性的な力と女性的な力が共に調和し、「スピリチュアルに協力し合っているとき」がもっとも理想的だと述べている。

『自分ひとりの部屋』の手稿には、ウルフが明らかにワイルド裁判を意識していることが見て取れる走り書きがある。たとえば、レズビアニズムについて物語を書こうとしたら、同性愛に対する厳しい法の取り締まりを思い出してしまうと綴った箇所である。『自分ひとりの部屋』には、レズビアン主人公の物語『孤独の井戸』を書いたラドクリフ・ホールをモデルとしたキャラクター、クロエとその恋人オリヴィアが登場する。ウルフは、草稿の段階で、この二人を「寝室を共有した」恋人同士という設定にしようと考えた。ただし、それをじっさいに書いてしまうとどうなるかという問題に想像をめぐらせている。

ウルフがクロエとオリヴィアについて綴る意識の流れはまさにワイルド裁判の記述と重なり合い、逮捕や裁判のイメージに溢れている。「回避できない警官 (inevitable policeman)」「法廷への出廷義務 (the order to attend the court)」「恐ろしい待機時間 (dreary waiting)」「裁判官が法廷に入ってきて会釈する (the Magistrate coming in with a little bow)」などが一気に脳裏に押し寄せる次の瞬間、「ああよかった (heaven be praised!)」、「ただの実験室だった (It was only a laboratory)」と冗談めいて書いている⁶。ウルフの小説『オーランドー』に、かつては男性であったが女性に変貌する、いわば両性具有的な性質を備えるクィアな主人公が登場する点でも、ワイルド裁判はウルフの創作の源泉になっていた。

ドイルの作品にも、このようなクィア性が創作の中心に描かれている。ジョン・トッシュによれば、19世紀末といえば家庭は「女性的な空間、あるいは女性的な領域」とみなされ、男性が家庭生活の主人であったオースティンの時代とは決定的に異なる⁷。そんな19世紀的な家庭空間に男性が入り込むのはジェンダー領域の侵食を意味していた。ドイルが描いたシャーロック・ホームズや、後述する霊媒師トム・リンデンが「家庭空間」を仕事場とすることはジェンダー規範の逸脱である。つまり、ホームズとワトソンのホモソーシャルな絆を象徴する住居兼職業空間 (221B ベイカー・ストリートのアパート) は、アンビヴァレントな空間といえる。

ドイツのホームズ・シリーズの「赤毛組合」でも、家庭空間が犯罪者の職場でもある質屋となっている。もっとも興味深いのは、ホームズが、この質屋を怪しいと考えた理由である。男の商売のわりに規模が小さいことに不自然さを感じ、外に(つまりここではトンネルを経由して銀行に)目が向けられる。「男性」ではなく「女性」が家で仕事に従事していたなら、“a mere vulgar intrigue”として処理され、犯罪と結びつかなかっただろうと指摘している⁸。

家に女でもいれば、けちな恋愛沙汰(大橋洋一訳:「げすな陰謀」)くらいにしか思わなかっただろう。だがそれは今度の場合、問題外だ。商売は小さなものだし、家の中にも、あれだけ手の込んだ準備をしたり、結構な経費をかけたりするほど値打ちのありそうなものなど、何一つない。すると、狙っているのはなにか店以外の所にあるものだ。(深町真理子訳、106頁)

ホームズが疑いの目を向けた質屋は、案の定、銀行から金貨を盗み出すための犯罪基地となっていた。何ヶ月もかけてトンネルを掘り、ロンドン有数の銀行の地下室に入り込もうとしていたトリックをホームズに見破られ、この犯罪グループはあえなく逮捕となる。

深町真理子が“a mere vulgar intrigue”というフレーズを「けちな恋愛沙汰」と訳しているのに対して、大橋洋一は「げすな陰謀」と解釈している。大橋がここであえて「陰謀」と訳したのは、男であろうと女であろうと犯罪の舞台が「家庭」となっている場合、クィア性を完全に排除できないものとして捉えているからである。大橋が「あとがき」でも述べているとおり、推理小説というジャンルは、「犯罪者を悪魔化し、犯罪者のうごめく闇の世界を魔界化するときに、伝統的にクィアなイメージを活用」してきた(大橋 323頁)。つまり、男性性にも、女性性にも分類され得ない「クィア」な家庭空間はそもそも「陰謀」が潜む空間として、物語に埋め込まれている文化的意味を訳出しているのだ。この解釈を裏付けるのが、「赤毛組合」に描かれるクィア性であろう。この物語は歴史的に女性を悪魔化するのに用いられてきた「赤毛」をモチーフにしている。質屋の男性が自分のこと

を「Stay-at-home-mom」ならぬ、「Stay-at-home-man」(出不精の男)(63)と女性的な形容をしている点もクィアな語感である。

家庭空間における「げすな陰謀」と見事に符合するケースが、もっとも有名なホームズ事件『バスカヴィル家の犬』である。ホームズが主犯のステープルトン氏の犯罪を証明するのを困難にした原因が、愛人ライアンズ夫人の伝言メモの供述である。ステープルトン氏はメモを巧みに利用し、バスカヴィル家のサー・チャールズ殺害を長らく隠し通した。このライアンズ夫人こそ自宅で「タイピスト」の仕事に従事する女性であり、「赤毛組合」でホームズが直感的にイメージするまさに「げすな陰謀」のイメージと重なり合う事件である。

ワイルドの『ドリアン・グレイ』でも、ホモソーシャルな関係が家庭空間に描かれる。とりわけドリアンと画家のバジル、あるいはドリアンとヘンリー卿の男同士の友情が、バジルの「アトリエ(Studio)」やヘンリー卿の「私室(private room)」で育まれることもクィアな空間構築に寄与している。バジルの最高傑作となるドリアンの肖像画が誕生するのも家庭兼職場のアトリエであることもまた興味深い⁹。シビル・ヴェインやヘッティ(マートン)とのヘトロセクシュアルな恋愛と対立する形で、このホモソーシャルな関係が描かれている点も重要である。

2. 聖と俗のあわい——霊媒師／ミディアムの表象

ウルフが想像した〈タクシーに乗り込む男女〉の空間がクィアであるとするなら、ドイルが描く〈霊媒師／ミディアムの世界〉もまたクィアであろう。デカルト的な二元論でいうと、女性性と結び付けられる受動的な〈身体〉と男性性と結び付けられる能動的な〈精神／霊〉は本来分断されている。ところが、ワイルドとドイルにとってミディアムを媒介とした作品世界は、物質と霊の境界があいまいなままであり、その両義性がクィアなのである。

エレナ・ゴメルは、死者／霊たちの媒介となる霊媒師の〈身体〉、あるいは〈声〉について、ジェンダーの観点から論じている。ドイルの小説に何度も女性霊媒師が登場することも、ワイルドとドイルが生きた時代の霊媒師に女性が多かったことと無関係ではない。霊の媒介、あるいは「容器(receptacle)」としての身体が文化的に女性性を担ってきた史実もある。ワ

イルド自身もじつは1894年に自らの手相を鑑定してもらっているが、その手相師も女性(ロビンソン夫人)であった¹⁰。ドイルは19世紀に流行した「交霊会」(séance)を題材とした短編「火あそび(Playing with Fire)」で、デラメア夫人という女性霊媒師を登場させており、彼女の声を通して、死者が「死後の世界」について語っている。ドイルが女性霊媒師の身体をある種の「容器」として受動的に捉えていたと考えることも可能かもしれない。しかし、「ミディアム(medium)」という言葉自体が示唆するとおりに、そもそも霊媒師には身体か霊のいずれかに帰属するという意味はない。

ミディアムはあくまで「聖」と「俗」のあわいを文化的に表現する立場であり、ドイル自身も、霊のメッセージを受動的に受け取るだけではない、社会的意義を持ちうる職業として霊媒師を表象している。ワイルドの「アーサー・サヴィル卿の犯罪」に登場する手相師ポジャースは高額な料金を請求する怪しげな男性ミディアムだが、ドイルが描く男性霊媒師のトム・リンデンは清貧を貫く人間で、金銭的利益より善なる行いを優先させている。妻と一緒に降霊を生業としているが、霊媒となるのはリンデンであることを見ても、ドイルは必ずしも女性だけがミディアムにふさわしいと考えていたわけではないことがわかる。

リンデンが登場するドイルの『霧の国』の刊行年は、奇しくも、オスカー・ワイルドの霊と交信したという女性霊媒師ヘスター・トラヴァース・スマスが残した自動筆記の記録 *Oscar Wilde from Purgatory: Psychic Messages* が発表された1926年と同じである。興味深いことに、スマスの自動筆記の虚偽説が浮上した際、ドイルはワイルドの降霊の真実性を擁護している。以下はスマスの証言が「嘘」だと主張するC. W. ソールの言い分である。

散文家としての、あるいはウィットの才能をもつワイルドを模倣する力が人が備えている可能性はあるだろう。しかしながら、その力には、筋書きを創作したり、物語を語る能力が欠けているといたい。短い風刺詩や装飾的な散文を書いてみたところで、本物のワイルドの文学的多芸を証明しきることはできない。彼は、優れた戯曲家であっただけでなく、素晴らしい古典研究者であり、さらには、生まれつきのストーリーテラーだったのだから。¹¹

〈ミディアム＝受動性〉を前提とするソールの主張は、おそらく当時のステレオタイプ化された霊媒師像を反映している。ミディアムが受身的な女性であるべきという支配的な考えは、能動的な才能をもつ作家や「ストーリーテラー」と相容れない関係にあるため、ソールのような見方が生まれるのである。しかし、ドイルはワイルドの霊の存在、ひいてはスミスの霊媒師としての重要な役割を擁護した。また、ドイルは自身の小説でリンデンという男性霊媒師／ミディアムを登場させることによって、ステレオタイプを脱却する新しい霊媒師像を創造した。

私的な領域である「家庭」が仕事場である職業を「クィア」とするとすれば、タイピストや探偵と同様、霊媒師もいわばクィアな職業である。ドイルは「花嫁の正体」でもタイピストを登場させているが、不可視の世界から届く「声なき声」を、身体化させ人間の聴覚に届く「声」にする霊媒師の役割も、どこかタイピストに似ている。さらにいえば、ミディアムという言葉は、靈感を得た芸術家がインスピレーションから見えるものに表現するという点で、「書く／描く」ことを仕事とする「作者(author)」や「画家(artist)」をも想起させる。

創造的な芸術家としてのミディアムという観点から『ドリアン・グレイの肖像』について考察してみるとどうだろうか。ドリアン・グレイの魂を絵に映し出すミディアム、つまり「霊媒師」のような役割を担う画家バジルも男性である。ドリアンが「自分自身の一部」とさえ感じられる肖像画を切り裂いた時に彼自身の命が奪われるのも、絵に魂が写し取られた寓意であると捉えることができる。また、シェイクスピアの役柄に生命を吹き込む女優シビル・ヴェインの役割についても、同様の考え方ができる。「彼女は生まれつきの芸術家なのだ (She is simply born an artist)」とドリアンが考える根拠は、彼女がまるでシェイクスピアが生み出したロザリンドやジュリエットそのものであると感じられる演技をし、さらに少年の格好をした両性具有的な姿が彼を魅了するからと説明している¹²。

ところが、皮肉にも、シビルが彼女らしさを発揮したとたん、ドリアンにとっては凡庸な演技にしか感じられなくなるのだ。ドリアンが夢中であったのは、作者が意図したキャラクターの霊が乗り移った、あるいは憑

依したシビルであったことは、バジルの描いたドリアンとパラレルの関係にある。ドリアンが芸術家と呼んだシビルのメディアム的な才能こそがバジルの魂を乗り移らせる能力に通じるのである。この芸術と生の反転が、心霊主義の言説と関わり合いをもつことがワイルドにとって重要だったのではないだろうか。

以上のことを踏まえると、ドイルにとってもワイルドにとっても、メディアムはたんなる受身的な「容器」ではなく、身体と霊が融合する「心霊体」(エクトプラズム)という現象に近い。女性的な身体(body)と男性的な霊(spirit)が融合する現象はまたしてもウルフの、男女が融合するクリアな、あるいは両性具有的なイメージを喚起する。バジルの身体は確かに「男性」だが、彼のホモソーシャルな欲望もまたクリアといえるのではないか。またしても偶然なのだが、ウルフの『自分だけの部屋』も1926年刊行であった。

3. スピリチュアリズムの〈懷疑〉と〈承認〉のあいだ

ドイルによるスピリチュアリズムの承認がもっともよく表れているのが『霧の国』だろう。心霊現象への懷疑とそれを受け入れる承認の問題はチャレンジャー教授に体现され、その承認こそが小説の主題であるかのように扱われることから、探偵小説の特徴は影を潜めた印象を与えている。ホームズ顔負けの頭脳をもつチャレンジャー教授は科学的根拠だけを信じるアンチ・スピリチュアリズム的な視点を持ち、最初は懐疑的な態度を貫こうとする。彼は、妻が亡くなった夜にドアをたたくような音が聞こえても、彼女の霊だという可能性を頑なに拒否する。しかし、物語の後半で、霊媒となって母のメッセージを届ける娘イーニッドの「声」が彼の態度に変化をもたらしている。

チャレンジャー教授が当初抱いていた懐疑心は別の人物によっても表明されている。マローンという新聞記者の上司ボーモント氏である。次第に「心霊体」(エクトプラズム)に傾倒していくマローンに、心霊現象に関する記事を書かないようにたしなめている。それについてボーモントと激しい口論をしたマローンはその直後、別の同僚に心の内を明かしている。

そうした事実(心霊現象など)がいかに組織的に闇に葬られてきたか、考えてもごらん下さい。たとえば、ロンドン市内のどの新聞が心霊体(エクトプラズム)をまじめに取り扱っておりましたか? また、このきわめて重要な物質が、科学者たちによって無数の証拠写真と共に検討され、描写され、裏書されているか、だれに想像できでしょうか? (『霧の国』、315-316頁)

さらにマローンは霊的世界を否定する新聞界についてこう続ける。「魂のかけらすらない人材しかいないみたいです。人間は悪くないが、最後の一人まで物質主義的なんですよ」(318)。19世紀末に心霊世界を信じ、魂の言説に依拠する人々が急増した背景には「物質への執着」に対する強い嫌悪があったのだろう。物語の中で「アイルランド人」(317)であるマローンが、同様にアイルランド人だったドイルの分身であると考えれば、同様に幽玄なケルト文化を糧にゴシック小説を書いたチャールズ・ロバート・マチュリン、シュリダン・レファニユ、ブラム・ストーカー、そしてオスカー・ワイルドらと地続きの文化を意識するだろう。

ドイルの視点は、死者の声に価値を置くリンデン夫人とも重なる。以下は、彼女の夫リンデン氏の身体に乗り移った女性の霊と、リンデン夫人の会話である。

「そうです、奥さん。あなたはここへ連れてこられて、この男の体に乗り移ることを許されたんですよ——」

「男ですって?」彼女は痙攣したような手でコートに触り、それから顔を撫でた。「そうです、その通り。男の人です。わたしは死んでいる! 死んでいるんだわ! どうしましょう?」

「われわれがいろいろ説明してあげられるように、あなたはここに来ていますよ。わたしの判断では、あなたは俗世界の女性——社交界の女性でした。いつも物質的なものを求めて生活していたようですね」

「わたしは教会へ通っておりました。毎週日曜日には聖セイーヴィア教会の礼拝に出席してましたわ」

「そんなことはなんの価値もありません。問題となるのは毎日の内面的な生活です。あなたは物質的な人でした・・・。」(224頁)

生前「世俗的(worldly)」で、「いつも物質的なものを求めて生活していた(lived always for material things)」女性の霊に、リンデン夫人は次のように語りかける。「問題となるのは毎日の内面的な生活です(It is the inner daily life that counts)」。

この言葉は、ワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』の一節を彷彿とさせる。それはちょうどドリアンが非情にも、自分の内面世界の美を描き出したバジルを殺害した後、良心の呵責に耐えかねてヘンリー卿に魂がいかに「現実を映し出す」かという話をする場面である。

「やめてくれ、ハリー(ヘンリー卿)。魂というものは恐ろしいほど現実を映し出す。買うことも、売ることもできるし、交換だって。毒を持ったり、完璧にすることだってできる。我々一人一人の中に魂があるんだ。僕は知ってる。」

「それについて確かなのかい、ドリアン？」

「確かだ。」

「ああ！それなら幻想に違いない。絶対に確かだと感じるものが真実であることは決してない。それが信仰心を持つことの不運で、ロマンスから学ぶことだ。なんて真面目なんだ。そんなに真面目になるな。」

(205頁、拙訳)

ドイルが「内面的な生活」と表現した霊的世界を、ワイルドは恐ろしいほど現実を映し出す「魂」という言葉で表した。物質的な世界とは違い、誤魔化しのきかないのがスピリチュアルな世界なのだという主張が垣間見える。

『ドリアン・グレイの肖像』をドイルの小説と併置したとき、ヘンリー卿に語らせる「なんて真面目なんだ。そんなに真面目になるな(How grave you are! Don't be so serious.)」はワイルドのアンチ・テーゼにも思えてくる。最初はユーモラスな幽霊を描くことによってスピリチュアリズムへの懐疑

を示唆する「カンタヴィルの幽霊」でも、最後にその幽霊に共感する少女を登場させることで、読者をスピリチュアリズムの「承認」へと誘っているようにも見える。

クラウソンが論じているワイルドのウォルター・ペイターの「真面目」の思想は、『社会主義下の人間の魂』という著書に如実に表れている¹³。私有財産制がイギリス社会の基盤となり、人間は多くのものを持っているが故に偉大な人間であるという幻想に陥り、それによって真の個人主義は押し潰され、虚偽の個人主義が正当化されてしまうと主張である。つまり、ワイルドは偽善という押し付けがましい利他主義のない社会システムにおいてのみ、人間の魂が自由に躍動できるという考えを持っていた。

真の自己実現の重要性は、『ドリアン・グレイの肖像』では不道徳に対して不寛容な画家バジルだけでなく、不道徳に寛容すぎるヘンリー卿の言葉からもうかがえる。後者によれば、「人生の目的は自己の成長である……自己実現を完全に行うことである——それが我々がこの世に生を受けた理由である (“[t]he aim of life is self-development. . . [t]o realize one’s nature perfectly——that is what each of us is here for” (16))」と述べており、逆説的ではあるが、このヘンリー卿の言葉にこそ、「魂」の問題を真面目に考えるワイルドの実直さを理解するヒントが隠されているのだ。ワイルドが法廷で真面目に愛について語ったことが腑に落ちないと感じてしまうのは、戯曲の『真面目は肝心』で真面目であることを茶化するワイルドのユーモアが矛盾する印象をもつからだろう。しかし、『社会主義下の人間の魂』のスピリチュアルな言葉こそ、ワイルドが自身の魂を解き放つものだと信じていたと考えることはできないだろうか。

4. 結びにかえて

ワイルドの芸術活動の根底にあったのは、現世利己的な卑俗さに対する批判精神である。小説、戯曲、批評いずれのジャンルにおいても、彼が嘲笑の対象としたのは、近代合理主義に蝕まれ、感受性や想像力の欠如した俗物であった。ユーモラスに表現されるか真面目に訴えられるかの違いはあるが、ワイルドのような芸術家らの反抗的姿勢こそが時代を変えていったといえる。ウルフがタクシーに乗り込む男女の「融合」の究極の仮想敵と

して思い浮かべていたのは、極端に家父長的な父親のレズリー・ステイヴンであったらう。ウルフが男女の「スピリチュアル」な調和を目指したのは、ステイヴンに代表される一種のホモフォビアに挑むための創造的な実験だったといえる。クロエとオリヴィアが「実験室」で共同作業していたというのは、まんざら嘘でもなく、ワイルドを含むクィアな芸術家たちはそのジェンダー規範の両義性を芸術に変容させる実験を繰り返していた。

ドイルも、霊媒師／ミディアムを登場させ、女性的〈身体〉と男性的〈霊〉を「融合」させる実験を行っていたのではないだろうか。たとえば、短編「火あそび」において、降霊会に参加したポール・ラ・デュークが、霊の力で思考を物質化する「実験」をする。ここで一角獣「ユニコーン」を光る「霧(mist)」として登場させているが、その「霧」が象徴するものとはなにか——物体のような気体のようなアンビヴァレントな存在として、まさに女でも男でもないクィアな存在として表現されているのではないか。タイトルに「霧」が入った『霧の国』でも、その曖昧模糊とした霊媒師の「声」は家父長的価値観を体現するチャレンジャー教授に価値転換させる力をもった。ワイルドも登場人物に様々な視点(画家、手相師、幽霊)を与え、クィアでアンビヴァレントな想像世界を創造している。この二人の文学的実験は、ホモフォビア的な社会にうごめいていた犯罪者の表象世界を、クィア性が横溢する、新たな現実へと変容させ、新時代の輝きを照らし出したといえる。

*本稿は2018年12月に開催された第43回日本ワイルド協会大会シンポジウムにおいて発表した原稿を加筆修正したものである。

注

- 1 H. Montgomery Hyde, 201. 引用は拙訳による。
- 2 Jeffrey Weeks, 213.
- 3 Weeks, 215. ワイルドと親交のあったドイルは後年、ワイルドの同性愛を病気だと考えていた。「同性愛」を医科学の蓋然性に依拠さえすれば、免罪の可能性も十分あったことを踏まえれば、法廷でスピリチュアルな愛を真面目に語るワイルドというのは、彼の作品にみられるスタイルとは乖離している。

- 4 Rebecca McLaughlin, 12-13. In BSU Honors Program Theses and Projects. Item 9.
http://vc.bridgew.edu/honors_proj/9
- 5 Virginia Woolf, 96-97.
- 6 Qtd by David Bradshaw and Stuart N. Clarke, 118n.
- 7 John Tosh, 179.
- 8 A. Conan Doyle, “The Red-Headed League,” 54.
- 9 Oscar Wilde, *The Picture of Dorian Gray*, 25-26.
- 10 Matthew Sturgis, 511.
- 11 C. W. Soal, “The Oscar Wilde Script: Replay to Doyle,” *Occult Review* July 1924.
43-45.
- 12 Wilde, *The Picture of Dorian Gray*, 74.
- 13 Nils Clausson, 345.

引用文献一覧

- Bradshaw, David and Stuart N. Clarke. *A Room of One's Own*. Malden and Oxford: Wiley Blackwell, 2015.
- Clausson, Nils. “Culture and Corruption”: *Paterian Self-Development versus Gothic Degeneration in Oscar Wilde's The Picture of Dorian Gray Papers on Language & Literature*. 39.4, (Fall 2003), 339-364.
- Doyle, A. Conan. “The Red-Headed League.” *Adventures of Sherlock Holmes*. New York and London: Harper & Brothers Publishers, 1892.
- . *The Hound of the Baservilles*. Harmondsworth: Penguin Books, 2001.
- . *The History of Spiritualism*. 2 vols. 1926. New York: Arno, 1975.
- Gilroy, Annan Noel. *Leslie Stephen: His Thought and Character in Relation to his Time*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1952.
- Gomel, Elana. “‘Spirits in the Material World’: Spiritualism and Identity in the ‘Fin De Siecle.’” *Victorian Literature and Culture*, Vol. 35, No. 1 (2007), 189-213.
- Hyde, H. Montgomery. *The Trials of Oscar Wilde*. New York: Dover Publications, 1962.
- Smith, Hester Travers. *Oscar Wilde from Purgatory, Psychic Messages Edited by Hester Travers Smith. Preface by Sir William F. Barrett*. New York: H. Holt, 1926.
- Soal, C. W. “The Oscar Wilde Script: Replay to Doyle.” *Occult Review* July 1924. 43-45.
- Sturgis, Matthew, *Oscar: A Life*. London: Head of Zeus Ltd, 2018.
- Tosh, John. *A Man's Place: Masculinity and the Middle-Class Home in Victorian England*. London: Yale UP, 1999.
- Weeks, Jeffrey. “‘Sins and diseases’: Some Notes on Homosexuality in the Nineteenth Century.” *History Workshop*. 1 (1976): 211-219.
- Wilde, Oscar. *The Picture of Dorian Gray*. Harmondsworth: Penguin Books, 2000.
- . *The Soul of Man Under Socialism and Selected Critical Pose*. Ed. Linda Dowling.

- Harmondsworth: Penguin Books, 2001.
- Woolf, Virginia. *A Room of One's Own*, Eds. David Bradshaw and Stuart N. Clarke. Malden: Wiley Brackwell, 2015.
- コナン・ドイル、『バスカヴィル家の犬』 東京、東京創元社、2013.
- 「赤毛組合」『シャーロック・ホームズの冒険』 深町眞理子訳、東京、東京創元社、2010.
- 「赤毛連盟」『クイア短編小説集——名づけえぬ欲望の物語』 大橋洋一訳、東京、平凡社、2016.
- 『霧の国——チャレンジャー教授シリーズ』 瀧口直太郎訳、東京、東京創元社、1971.
- 『毒ガス帯』 瀧口直太郎、東京、東京創元社、東京、東京創元社、1971.